

フクシマ連帯キャラバンに参加して

東北地方青年婦人部 部長
薄井 栄人

今回、3年ぶりにフクシマ連帯キャラバンが全国規模で開催されました。開催できない3年間、規模の縮小とできる限りの感染対策を取りながら何とか運動を切らさない取組を行ってきました。その結果、今回のフクシマ連帯キャラバンの開催は何とも言い難い嬉しさがありました。

フクシマ連帯キャラバンは12年前の福島第一原発事故からの軌跡を自分の足で歩き、目でみて肌で感じ、想いを声に出すことができる運動です。フィールドワーク、署名・街宣行動、集会参加、自治体要請行動、開催期間中に様々な活動を行います。結果、フクシマ連帯キャラバンは毎年違った活動内容になります。原発事故から12年もの時が経ち、復興に向けて前に進んでいることも毎年増えてきますが、帰還困難区域の地域は12年前から時が止まったままです。あるいは雨風や害獣による家屋へのダメージもあり後退している現実も実際にはあります。そういった場面を今回のフィールドワークや意見交換会で改めて感じることができました。意見交換会で講師をしていただいた津島原告団の皆さんとの会話の中で「汚したものを綺麗にして返してもらいたいだけ」この言葉の重みを確かめながらフィールドワークを行い、実際に現地へ足を運ばなければわからないこと、メディアで取り上げられていることがすべてではないことを学ぶことができました。

そのような体験を踏まえて、街宣行動・署名活動を福島駅前で行いました。原発は反対と快く署名を書いてくれる人、私は賛成だからと意見してくれる人、無関心で通り抜けていく人、様々な思いを感じながら街宣・署名を行いました。私たちは決して賛成派や原発に無関心の人達に反対の意思を押し付けているわけではない、人それぞれある想いの中で自分の気持ちを伝え、一人でも多くの人がある想いに賛同してもらえ活動継続していくことが大切だと思えるようになりました。

自治体要請では、茨城県東海第二原発から半径30キロ圏内の自治体すべてに要請書を提出しました。過酷事故発生時の避難計画はいまだに策定できていない事実がある中で再稼働をさせないでほしい、福島第一原発事故で出た放射能汚染水を海に流さないでほしい想いを訴えてきました。自治体ごとにどれだけ真剣になって課題に取り組んでいるかを意見交換の会話で感じることができました。毎年、行っているこの要請行動も自治体への認知度が確実に上がり、積み重ねている行動の一つの結果を垣間見ることができました。

最終日のさようなら原発全国集会でも参加された方がフクシマ連帯キャラバン隊を拍手で迎え入れてくれました。その大観衆の中で団長を務めてくれた小名浜支部矢内君からキャラバン隊に参加した全員の気持ちを背負って堂々と発言をしてくれました。この発言をもとに来年以降のフクシマ連帯キャラバンへ繋げていくことができると思います。

最後になりますが、今回のフクシマ連帯キャラバンを成功させるために沢山の方々が協

力をしてくれました。企画をさせてもらう中で、フクシマ連帯キャラバンへの想いを伝え続け賛同してもらった結果、全国の仲間が集まってくれました。そして、開催中に職域を守ってくれた仲間、現地で参加できなくても開催に向けて共に本気で取り組んでくれた仲間、今回のフクシマ連帯キャラバンは本当に沢山の方々に支えられて開催できたと思っています。そしてキャラバン隊はその人たちの分まで想いを背負ってやり通せたと自信をもって言える活動ができました。今回できたこの団結力は今後の青年部活動において無くてはならない大きなピースとして、これからの活動を沢山の仲間たちと盛り上げていきたいと思えます。本当に、ありがとうございました！